

## 参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「スペイン風邪～100年前の感染症対策～」
著者 / 所属	吉岡 成子 / 厚生労働委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	431号
刊行日	2021-2-5
頁	2
URL	<a href="https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20210205.html">https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20210205.html</a>

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75020) / 03-5521-7686 (直通))。

厚生労働委員会 専門員

よしおか せいこ  
吉岡 成子

新型コロナウイルス感染症の出現から1年余が経過した。この1年、新型コロナウイルス感染症によって私たちの日常は大きく変容した。

振り返ってみると100年前、「スペイン風邪」と呼ばれる新型インフルエンザ(A/H1N1 亜型。ただし、今ではスペインが発生地でないことが明らかになっている。)が全世界を席卷した。スペイン風邪は、1918(大正7)年から1920(大正9)年にかけて3つの大きな流行の波を繰り返した。世界で人口の25～30%が罹患し、4,000万人が死亡した(WHO。ただし、実際の死亡者はその倍、あるいは倍以上という説もある。)。史上最大の感染症と言われる所以であり、青壮期の犠牲も大きかった。新型コロナウイルスについて現在変異株が報告されているが、スペイン風邪については第2波以降強毒化したと言われる。

1922(大正11)年に内務省衛生局が刊行した『流行性感冒』は、3回の流行を通じた我が国の総患者数は2,380万4,673人、死者は38万8,727人に上ったと記している。第1回の流行では全人口の約4割が罹患し、患者の死亡率は1.22%であった。これに対し、第2回の流行では患者数は前流行の10分の1に過ぎなかったものの患者の死亡率は5.29%と著しく高くなった。

当時の予防策は、①マスクの使用の奨励、②マスクをしていない者の劇場、寄席、活動写真館、電車・乗合自動車への入場等の制限、③流行地における民衆の集合の回避、④患者の隔離(外出の遠慮)、⑤うがいの奨励等である。現在の感染予防策にも通じるものだが、手指の消毒は含まれていない。また、マスクはこれを機に我が国に浸透していったようである。さらに、後半には「ワクチン」接種も始まったが、この時代はまだインフルエンザウイルスは分離されておらず、ワクチンは「インフルエンザ菌」(このb型がHib感染症である。)あるいはこれと肺炎双球菌等との混合ワクチンであった。

この100年間に医学・医療や衛生水準は格段の進化をとげ、新型コロナウイルス感染症に関しても、我が国でもワクチン接種の開始に向けた準備が進められている。しかし、現時点で新型コロナウイルス感染症の収束は見通せない状況にあり、多くの医療関係者が最前線でこれに立ち向かっている。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、感染症に対応した医療体制等新たな問題を認識させるとともに、健康危機管理の在り方、経済と感染症予防の両立、地球規模の感染症対応等の課題を顕在化させた。

ペストやコレラ、あるいは結核等人類は長年にわたり感染症と戦い、結果的にその多くを克服してきた。新型コロナウイルス感染症についても一日も早くこれを克服し、「新たな日常」への対応も含め、その検証や教訓が次の時代に活かされる日が来ることを望みたい。